

人は死ぬばゴミになる

— 私のがんとこの闘い —

伊藤栄樹

新潮社

人は死ぬばゴミになる

私のがんとの闘い

伊藤栄樹

新潮社

人は死ねばゴミになる

—— 私のがんと闘い

一九八八年六月一日 発行
一九八八年六月三〇日 三刷

著者 伊藤栄樹

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—266—5111
（編集部） 03—266—5411

振替東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

定価 一〇〇〇円



© Shigeki Itoh 1988, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-369701-6 C0095

人は死ねばゴミになる■目次

はじめに 7

人間ドック 10

虫垂炎 16

告知 21

人生設計のやり直し 29

小康 38

再発 45

鼻からパイプ 57

イレウス管の効能 103

おつりのいのち 115

再手術 127

職場復帰へ 135

五カ月ぶりの退院へ 150

三たび入院 158

退官 161

「手術のような処置」 179

人は死ねばゴミになる

——私のがんと闘い——

はじめに

昭和六十二年七月十三日、“虫垂炎”手術、実は盲腸がん。同年十月七日、がん再発、腸閉塞症状で入院。同年十二月十八日、腸三カ所を手術、人工肛門をつくる。そして、今は昭和六十三年の一月も過ぎて二月。これが、この半年余のがんとのか合いの経過である。

この間、十一月上旬現在、早ければ月末まで、長くもって年内一杯のいのちというのが客観的な判断であったようだ。私自身は、少しずれた同月中旬になって、主治医のA先生に、

「正月過ぎまで生きられるでしょうか」

と尋ねてみたが、イエスの返事はいかに得られなかった。

そこで、どうせ残り少ないのなら、後に残る家族のため、親しい友人たちのため、私の発病から死までを努めて冷静、客観的に書きとめておこう、こうして病室に閉じ込められている身の上では、それ以外に意味のある仕事もできそうにないから、という気になった。

A 先生に聞いてみると、がんという病気の特徴から、患者の頭脳は、死の瞬間まで明晰なのが常だという。そうだとすれば、最後の方は、妻でも口述を筆記してくれば、「私の発病から死まで」が文章として完結できるだろうと考えた。

幸い、十二月の声を聞くと、鼻から腸まで通した「イレウス管」のおかげで体調が安定してきたようであった。そこで、気分の良い時を選んで、病室に持ち込んだワープロに向かうことにした。その結果が、御覧の文章である。

ただ一つ、私の目算が狂って、お詫びしなくてはならなかったことがある。それは、私の「死」の時期が、主治医以下医師団の努力の結果、思いがけなく延びて、六十三年一月中旬からは、一時的なことにはなろうが、職場に復帰できるまでになり、年一回の「検察長官会同」にも出席することができ、余勢をかって二月三日の

はじめに

誕生日を迎えることができたことである。「私の発病から死まで」を完結させるのには、一呼吸を要することになった。

そこで、ここまで書いた文章をひとまずまとめておく次第である。

人間ドック

昭和六十二年七月三日、今年の人間ドックをすませた。

私には、四十年來の持病がある。乾癬^{かんせん}という皮膚病である。作家の吉行淳之介氏も同病とのことだが、氏の著書『日日すれすれ』の記述を見ると、氏のは尋常性乾癬のように思われる。私のは、これに膿疱性乾癬^{のうほうせい}というのが一緒になっている。毎年、汗をかきだす六月一日頃になると、わきの下、鼠蹊部^{そけいぶ}、膝の裏などに湿疹ができ、じわじわとおよそ下着で覆い隠されるべきすべての部分に広がっていく。それらは、大して痛くもかゆくもないが、皮膚の相当な面積が赤くドロドロにただれて、下着に貼りついてしまう。そんな状態が夏中続いたあげく、いつも十月一日頃になると治まっていく。

実に長い間、いろいろな病院であらゆる治療法を試みたが、何しろ原因がわからない病気だから、西洋医学では的確な治療法はないといわれ続けてきた。漢方薬をすすめて下さる方もあったから、これまたいろいろ試みてみたが、効いたと思えるものは、絶えてなかった。

結局、一番いい対処策は、こいつと仲よく同居していくことだとあきらめた。できている乾癬に、毎晩たんねんに「ソリオン」という黒いタール製剤を塗り、シツカロールをふって、からだを朝鮮飴のようにし、下着を包帯代わりにする。ソリオンは、発がん性があるというので、とくに製造が停止されているが、私には虎の子なので、あと二十年分位をためこんであるのである。これはたしかに効く。塗ったところは、数日でかさぶたになって、治って落ちる。もつとも、そのすぐ隣りに新しいやつができるのを防ぐ力は全くないが。ときにルールに違反して、下着の覆う範囲を逸脱して発生する乾癬には、あまり効かないが、仕方がないから、副腎皮質ホルモン剤のテープを貼ってごまかしておく。

このような乾癬との付き合いから、私の夏の生活には、人さまと違ったスタイルが

生じている。その一つは、この時期の出張を一切御勘弁願っていることである。出張先の旅館やホテルで人間朝鮮鮎を製造するのは、まことに厄介だ。いま一つは、六月一日から九月三十日までの間、“漢字で書ける酒”を断つことである。経験則上、アルコールをとって汗をかくことは、明らかに乾癬の発育を助長する。それは、酔いが朝鮮鮎の製造を面倒くさくしてしまうことも大いに関係があるだろう。

私は、多少は人にも知られた酒のみである。夏だからといって、酒を全くやめるわけにはいかない。そこで、おいしい酒を飲まないことにする。漢字で書ける酒は、おおむねおいしい。清酒、焼酎、葡萄酒、麦酒（ビール）、火酒（ウオッカ）、どれもこのように漢字で書ける。これらを消していくと、結局飲めるのは、ウィスキー、ジン、テキーラといったところになる。

かつて、元警視總監・防衛大学校長の土田国保さんにこの話をしたところ、若い頃香港領事をされた折の知識として、「伊藤さん、ブランドイは、中国語では“拔蘭地”と書くのですよ」とやられて、その年からブランドイも漢字で書ける酒になってしまった。土田さんの話がほんとうかどうかは、確めたことがないが。

そこで、毎年五月三十一日には、午後十二時まで熱燭^{あつが}をやり、午前零時にウイスキーに切り換える。九月三十日には、水割りをチビチビやりながら、時計を眺め、午後十一時五十分になると、おもむろに清酒のお燭の準備を始めて、午前零時を待つということになる。

ところで、このような酒の飲み方の思いがけない副作用として、この夏場四ヵ月の間に体重が三キログラム落ちる。おいしいと思って飲まない酒は、人を太らせないようである。かくて、私の体重は、例年、無差別に酒を飲み続けた末の六月一日において七十三キロ前後になり、九月三十日に七十キロ前後になるというサイクルを繰り返してきた。

ところが、体重が七十三キロに近付くと、尿に糖が少し出始めるなど、成人病特有の徴候を見せるようである。そこで、私は、もう十年ほど前から毎年、自分の体調が警戒区域に入る六月初旬に人間ドックに入るようにしているのである。

初めてドックに入ったのは、私が法務事務次官のときである。次官の前の刑事局長時代は刑事局長の当り年で、ロッキード事件に続いて、ダグラス・グラマン事件

といわれたものが発覚、捜査の対象となり、「初めに五億円ありき」などといったキザなせりふを使ったりして国会答弁におおわらわだった。そうかと思うと、パングラデシュのダッカで日本赤軍によるハイジャックが発生し、首相官邸で徹夜に次ぐ徹夜を重ねさせられたあげく、“超法規的措置”をやむなくさせられた。平素、上が一二〇、下が七五程度というのが私の血圧だが、急に一六〇を超すようになった。一般的な疲労のほか、食生活の不規則から体重七十五キロまで太ってしまったことにも原因があったのだろう。たまたま当時の国税庁長官渡部周治さんが、雑談をきっかけに、東京・港区のクリニックを紹介して下さったというわけである。

今年は、六月に「会同」その他の公式行事が集中したため、ドック入りがほぼ一カ月遅れてしまった。よいいなことだが、法務・検察の世界には、会同という古めかしい名前が残っている。要するに、全国の検事をポスト、担当任務に応じて、中央に招集して開く会議のことである。検事は、一人ひとりが独立して職権を行使する建前になっているから、会議でも、一堂に会して議論するだけで、結論を出して